ハンドテストとの出会い

私がハンドテストを初めて知ったのは 1968 年である。1967 年 9 月から 1 年の予定で New Jersey State Pre-doctoral Internship Program in Clinical Psychology に参加している時であった。これは、当時州立施設で働く臨床心理士の不足に悩んでいたニュージャージー州政府がスポンサーになって始めたプログラムで、2 種類の州立施設で異なる臨床グループを経験し、心理診断、個人心理療法、集団心理療法をスーパーバイザーの指導の下に既定数を実施することが修了の要件であった。私は、前半を Johnstone Training Center for Mentally Retarded Adolescents で、後半を Greystone Park Mental Hospital で過ごした。ハンドテストに出会ったのはこの病院の臨床心理部門の用具室である。

1960 年代のアメリカ州立精神病院は、広大な敷地に病棟が散在し山一つがまるまる病院の敷地であった。勤務していた臨床心理部門の建物は麓の平地にあり、ニューヨーク行のバス発着所も近くにあった。アメリカの臨床心理部門が所蔵している検査用具に興味があり、ケースの予約が入ってないときは、さまざまな検査の勉強をしていた。ハンドテストは、家庭裁判所を休職扱いで留学させてもらっていた私には、実施時間の短さやアクティングアウトの傾向の把握しやすさが魅力的であった。

私が、このインターンシップに参加できたのは、日本臨床心理学会*とニュージャージー州のプログラムが、毎年 1 人日本人をインターンとして受け入れるという協定を結んでいたからである。渡米の旅費は自費ながら、インターンには月給が支給されていた。日本において 1960 年代は臨床心理学の黎明期で、学会を設立した諸先輩の努力でカンサスとニュージャージーに 1 人ずつインターンを派遣する若手養成のプログラムがあった。3 回目の派遣募集で選抜されたのが、佐藤文子さん（カンサスに派遣）と私であった。このようなわけで、学会に対して研修の成果を報告する義務を感じていた私は、1968 年の夏頃よりお土産になりそうなものを探し始めていた。ハンドテストは日本では知られていなかったので、持ち帰る候補の一つとして、開発者の Wagner 博士から関係論文を送ってもらった。

インターンシッププログラムは 1 年であったが、私は初めの 3 か月は一人で臨床実務を実施するだけの英語力がなかったため、修了要件を満たすために 3 ヶ月間インターン期間を延長した。私が帰国したのは 1968 年 11 月末で、大学紛争の真最中で学会も巻き込まれ派遣プログラムもストップした。留学の成果報告の一環として「ハンドテスト紹介」を日本臨床心理学会の機関紙、『臨床心理学研究』9 巻 1 号（1970 年 4 月）に掲載してもらった。

京都家庭裁判所に復職してからは、そこの科学調査室でハンドテストを積極的に使っていくのみならず、当時神戸鑑別所の技官をしていた大学時代の同級生の武田由美子さんにも紹介し、鑑別所でも使ってもらった。彼女との共著「ハンドテスト解釈仮説の再検討―日本の非行少年を中心に」を『犯罪心理学研究』9 巻 2 号（1972 年 12 月）に出すことができ、矯正施設の関係者にも知ってもらうことができた。使っていくうちに文化差や時代差（たとえば、拳骨の握りこぶしに「ストで頑張ろうと拳を突き上げる」といった反応は日本

独特のものであった）がハンドテストの反応には出やすいことに気づき、非行少年以外の日本人のデータを基にしたマニュアルを作る必要性を感じ、有志を募って研究会を立ち上げ、そこに学卒したばかりの山上栄子さんが矯正分野外から初めて参加された。個別テストであることや研究会のメンバーは仕事をしている人がほとんどだったので、データ集めは遅々として進まなかったが、データを少しずつ蓄積していった。しかし、私のカナダ留学や研究関心が心理測定から社会文化的なものと心理過程の関係に移行してしまったために、研究会を抜けることになった。日本の臨床心理学を担う若手を育てるというアメリカ派遣のプログラムの趣旨を十分履行せぬまま、私はハンドテスト研究から去ったのである。

（文責　箕浦康子）

*1982 年設立の日本心理臨床学会とは別の組織である。